

ベストセラーで振り返る

中公文庫の40年

40th



2013年春号
中央公論新社

目次

ご挨拶

年代別 中公文庫ベスト10 2

中公文庫を語る 嵐山光三郎×鶴飼哲夫／司会 瀧井朝世 4

●わが青春のベストセラー

誰もが愛した小説——『赤頭巾ちゃん気をつけて』 小池真理子 16

ひとつの土台として——『言わなければよかったのに日記』 角田光代 20

『江戸吉原図聚』 誉田哲也 24

『八日目の蟬』 島本理生 28

書店さんからの声 31

年代別 中公文庫ベスト10

●70年代

- 1 庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」
- 2 北杜夫「どくとるマンボウ青春記」
- 3 宮尾登美子「陽暉楼」
- 4 宮尾登美子「權」(上)
- 5 宮尾登美子「權」(下)
- 6 庄司薫「白鳥の歌なんか聞えない」
- 7 渡辺淳一「白き手の報復」
- 8 渡辺淳一「阿寒に果つ」
- 9 井上光貞「日本の歴史1」
- 10 北杜夫「どくとるマンボウ途中下車」

●80年代

- 1 赤川次郎「静かなる良人」
- 2 赤川次郎「本日は悲劇なり」
- 3 立花隆「宇宙からの帰還」
- 4 渡辺淳一「白夜——彷徨の章」
- 5 渡辺淳一「白夜——朝霧の章」
- 6 村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」
- 7 渡辺淳一「ふたりの余白」
- 8 A・トフラール／徳岡孝夫訳「第三の波」
- 9 和久峻三「民法おもしろ事典」
- 10 S・フィッツジェラルド／村上春樹訳「マイ・ロスト・シティー」

●90年代

- 1 吉本ばなな「TUGUMI」
- 2 内田康夫「竹人形殺人事件」
- 3 戸部良一ほか「失敗の本質」
- 4 宮尾登美子「蔵」(上)
- 5 宮尾登美子「蔵」(下)
- 6 司馬遼太郎「韃靼疾風録」(上)
- 7 内田康夫「鳥取雛送り殺人事件」
- 8 司馬遼太郎「韃靼疾風録」(下)
- 9 司馬遼太郎「空海の風景 改版」(上)
- 10 内田康夫「坊っちゃん殺人事件」

●00年代

- 1 角田光代「八日目の蟬」
- 2 菅田哲也「ジウI」
- 3 樋口有介「ピース」
- 4 菅田哲也「ジウII」
- 5 菅田哲也「ジウIII」
- 6 W・H・マクニール／増田義郎・佐々木昭夫訳「世界史」(上)
- 7 堂場瞬一「雪虫」
- 8 今邑彩「ルームメイト」
- 9 林真理子「強運な女になる」
- 10 森博嗣「スカイ・クロラ」

中公文庫を語る

嵐山光三郎（作家）× 鶴飼哲夫（読売新聞編集委員）

司会 瀧井朝世（ライター）

● 創刊の頃

瀧井 中公文庫創刊四〇周年ということで、創刊当時のこと、中公文庫の思い出や、年代別ベスト（本書二〜三頁参照）についてお伺いしたいと思います。創刊は一九七三年、嵐山さんはすでに編集者としてご活躍されていましたよね。

嵐山 雑誌『太陽』の編集部において三十一歳でした。この頃強く印象に残っている出来事は七二年四月十六日の川端康成の自殺です。逗子マリーナの仕事場で睡眠薬を飲んでガス自殺。三島由紀夫が死んだのは……。

鶴飼 大阪万博が開催された七〇年でしたね。

嵐山 そう。十一月二十五日です。忘れもしないですよ。ぼくはその一ヶ月くらい前に三島由紀夫に会ってたから、すぐ自衛隊に行っただけだけど、中には入れてもらえなくて。ニュースで三島由紀夫が死んだって聞いて体が震えました。七一年の築地本願寺での三島の葬儀を取り仕切ったのは川端康成でした。右翼も左翼も来たから、「騒ぐ者がいたら、ただちに私は葬式をや



嵐山光三郎…1942年静岡県生まれ。作家。平凡社『太陽』編集長を経て独立。『悪党芭蕉』により泉鏡花文学賞、読売文学賞をダブル受賞。『追悼の達人』『桃仙人』など著書多数。



めさせます」って挨拶したの、覚えてますよ。

鵜飼 「葬式の名人」といわれた川端らしいエピソードですね。

嵐山 その川端康成も自殺して。三島由紀夫の自殺よりもそちらのほうが衝撃が大きかったです。日本で初めてノーベル文学賞をとった人が、惜しげもなく死んでしまったから。三島の葬儀を、たぶん決死の覚悟でやって、その一年後に、自分もあっさり死んじゃう。文学的状况としては、川端康成の自殺によって出版界全体が一種の鬱になったっていう雰囲気がありましたね。

鵜飼 その鬱の状況にプラスして、七三年にオイルショックがあったわけですよ。

嵐山 そうですね。鵜飼さんはそのころ、高校生くらいでしょ？

鵜飼 いや、まだ中学二年生でした。紅顔の美少年でした（笑）。

嵐山 あ、中二？（笑）。瀧井さんはこのころ生まれてる？（笑）

瀧井 生まれたばかりの感じですよ（笑）。

●創刊時ラインナップを顧みる

鵜飼 一九六九年に庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』が芥川賞をとり、私たちが若者の間で

むと偉くなったような気がしました。その後、新潮文庫、角川文庫が創刊になって。

鵜飼 新潮文庫は広く名作を文庫化していましたが、角川文庫は山田風太郎、坂口安吾や寺山修司らユニークな作家の本を次々出した。各社の文庫を創刊年代順にいうと、七一年に講談社文庫。七三年中公文庫。七四年文春文庫。で、七七年集英社文庫、っていう流れです。

●中央公論社は秘密結社？

鵜飼 中公文庫って面白いなと思うのは、古井由吉さんの作品は長いこと埴谷雄高の推薦文を裏表紙に印刷した初期短篇集『円陣を組む女たち』しかラインナップに入っていなかった。後藤明生さんも、谷崎賞をとった『吉野大夫』だけぽこっと入っていた。安岡章太郎さんの『舌出し天使』、吉行淳之介さんが戦中時代を書いた『焰の中』、野坂昭如さんの文学の極致をなす『骨餓身峠 死人葛』など数は少ないけれど、作家のユニークな作品を厳選していた。しかも九〇年代になるまでは絶対に絶版にしなかった。目利きの編集者の目が光る稀有な文庫だと思えます。僕は、「いつかこの本との運命的な出会いがあるかもしれない」と、肌色の中公文庫の背をみるたび書店でどきどきした記憶があります。

嵐山 ぼくの中央公論のイメージは、「秘密結社」。

瀧井 えええ？ 秘密結社？（笑）

嵐山 昔、たまたちよいん滝田樗陰が人力車に乗って原稿依頼に来るのを作家たちが待っていた、って伝説が

あったでしょ。そのあと嶋中家という柔術道場みたいな社主がいて、編集者の目つきが違ったもの。そんな秘密結社が文庫を出したわけですよ。だからみんなすごく注目した。

鵜飼 「古本屋泣かせ」って言われた渋い本を意識的に入れている。三田村鳶魚みたらえんぎよのシリーズとか矢田挿雲そうん『江戸から東京へ』とか。なんでこれが文庫コーナーに並んでるのかよくわからなけれども編集者の不思議な眼力というか、趣味に裏付けされた本が文庫になっている。

嵐山 そう、それがくせになるんですよ（笑）。

鵜飼 統一感がないところに、逆におもしろさがある。そこが魅惑的というか蠱惑的こわくというか。**嵐山** 書店に各社の文庫の棚があるけれど、中公文庫の棚は「寄らば斬るぞ」みたいな電波がびりっとくる感じがする。

鵜飼 そう。なんかあの……安心感が、微妙にない、っていうか（爆笑）。ただ者でない気配がね、醸し出されている。

●七〇年代ベストを振り返る

嵐山 ぼくは、深沢七郎『言わなければよかったのに日記』。これが、傑作中の傑作なんです。

鵜飼 『檀流クッキング』もいいですね。高一のときに檀一雄の『火宅の人』が新潮社から出るんですよ。サム・フランシスデザインの箱入り、パラフィン紙がついていて下は白の布貼り。開くとバターみたいな紙の匂いがした。この小説のすごさを当時、どのくらい理解できたかは



東大1970年卒業。慶應文学部出版部勤務を経て、朝日新聞「売れる本」を担当、「王様のランチ」を企画。独立。朝日新聞「売れる本」を担
井京文学部卒業。朝日新聞「売れる本」を担
朝日新聞「売れる本」を担
世生まれ。朝日新聞「売れる本」を担
1970年慶應文学部出版部勤務を経て、朝日新聞「売れる本」を担
…1970年慶應文学部出版部勤務を経て、朝日新聞「売れる本」を担

あやしいけれど、読んですっかり無頼派気取りになっちゃった。嵐山さん、檀さんとはけっこう親しかったんですね。

嵐山 檀さんのところへは二十三歳から出入りしてたんで、檀流クッキング、私も全部作れますよ。檀流クッキングが、料理本として革命的なのは、分量とか調理法がいいかげんなんです。たとえばカレーライスだったら、まずタマネギを薄くスライスして、フライパンでバターで三十分炒める。そのあいだ缶ビールを飲んでいます。この缶ビールが重要（笑）。ハウツー本でありながら、読んでもおいしくて。そういうスタイルは檀一雄が始めましたね。

鵜飼 しかも豪放磊落な感じで、文学そのままの味わいがあった。

嵐山 中公文庫の料理シリーズは面白い。辻嘉一の『味覚三昧』、子母澤寛『味覚極楽』、『エスコフイエ自伝』もある。檀さんの息子、檀太郎の『檀流エスニック料理』はビジュアル版。

鵜飼 吉田健一『私の食物誌』、開高健さん『小説家のメニュー』も。

嵐山 丸元淑生『新家庭料理』も入ってたよね。「親子兄弟」でいうと、夫婦で入ってるのが辻邦生・辻佐保子、それから武田泰淳・武田百合子、さらに娘の武田花。

瀧井 『富士』とか『富士日記』の印象が、中公文庫すごくありますね。

嵐山 埴谷雄高は武田百合子さんはもともと、武田泰淳にも負けなくらいの才能があったって褒めてます。武田泰淳はもちろんだけど武田百合子さんの中公文庫のものは、みんないいね。

鶉飼 文章がいいですね。言葉で対象をまるごと掴むような表現のしかたが。

嵐山 この『目まいのする散歩』は武田泰淳著だけど、実は武田百合子さんなんだよね。

鶉飼・瀧井 えっ？

嵐山 百合子さんが口述筆記してるわけですよ。武田泰淳が喋ってるのを筆記しながら、百合子さんが「それは違うわよ」っていうと、括弧して「と、百合子は言っている」って、それをまた百合子さんが書く。この手はね、すごいですよ。口述筆記のドストエフスキーも真似できない。このあたり百合子さんがどんどん化けていく。

●八〇年代ベスト

鶉飼 この中でぼくが印象にあるのは、学生時代にはまった筒井康隆さんの『東海道戦争』と『アルファルファ作戦』。『ベトナム観光公社』も合わせ初期三傑作集が入っている。庄司薫さんが福田章二名でデビューした中央公論新人賞受賞作『喪失』、小川洋子さんのデビュー作を収録した『完璧な病室』、川上弘美さんのデビュー作を収めた『神様』。池澤夏樹さんの第一長篇の『夏の朝の成層圏』も中公文庫。初期の重要な作品を収められているのが特徴かな。

嵐山 女性筆者も中公文庫の特徴。宮尾登美子、藤原てい、澤地久枝、それから宇野千代。

鵜飼 宇野千代いいですよ。初期から晩年の『生きていく私』まで。

嵐山 『おはん』なんて泣けますよ。それから塩野七生。平岩弓枝。

鵜飼 それから有吉佐和子もね。最近は『ふるあめりかに袖はぬらさじ』新装版が出た。

嵐山 八〇年代で印象に残ってるのは立花隆の『宇宙からの帰還』。いろんな宇宙飛行士のその後を具体的に取り上げていて面白かったですね。立花さんの中でこれがいちばん好きだなあ。

鵜飼 渡辺淳一さんが強いですね。七〇年代にも、八〇年代にもベストセラーに入っている。

昨年、初期の医学もののシリーズが中公文庫に入って、巻末のインタビューが読みでがあった。

嵐山 あと、村上春樹が。

鵜飼 短篇の名手でもある村上春樹は、翻訳も入っています。司馬遼太郎はどうしても幕末ものや明治ものにばかり光があたるけれど、『空海の風景』は宗教と人間を根本から書いた傑作だと思います。司馬さんは産経新聞記者時代、宗教の担当もやっていた方です。だから密教という非常に難しい世界を通して空海という天才の具体的な人間像を描き出している。思想嫌いを公言した司馬さんが、宗教思想に本格的に取り組んでいることも面白い。ぼくは司馬さんの作品の中では実はこれが好きで、もっともっと読まれたらいいなと思ってるんです。

嵐山 岸田秀『ものぐさ精神分析』。目を見開かれるところがあった。

鵜飼 性的な人間の情感と心理を絡めていて、とにかくユニークでおもしろい(笑)。八〇年代は小此木啓吾の『モラトリアム人間の時代』も大ヒットしましたね。単行本が出たのが、一

九七八年。いつか「ほんとうの自分」になることを夢見て、いつまでも自己決定できない「モラトリアム」な人々の話を書いてある本書を読んで、自分たちのことを言われているような感じになりました。ちょうどそのころ村上春樹さんが『風の歌を聴け』でデビュー。村上さんの主人公も、どこか自己決定できなくて、ちょっと踏み惑いながら、遠くからシニカルな感じで社会を見ていて、「やれやれ」って言っている。あの時代の若者の空気も思い出します。『文章読本』も七〇年代のベスト五〇に、三島と谷崎のがランクインしている。八〇年代になると、ちょっと気取って書け、っていう丸谷才一さんの『文章読本』が入った。これ三大『文章読本』。

●九〇年代ベスト

瀧井 九〇年代に行きましよう。

鵜飼 漫画がすごいですねえ。『まんが道』など傑作も多いけれど、当時は中公がマンガを出すことにはちょっと違和感があったな。急に秘密結社がAKBになっちゃったみたいな(笑)。しかもその頃から背表紙の色がカラフルになって。肌色が基調で、ほとんど絶版にしないという方針の中公文庫は、いつ書店に行っても、「おかえりなさい」みたいな安定感もあったのにそれが、中公文庫よ、どこへ行く? という感じになったな。

嵐山 吉本ばなの『TUGUMI』。これブームになったね。

鵜飼 これミリオンセラーですからね。

嵐山 司馬遼太郎の『韃靼疾風録』はおもしろかったな。だからそういう漫画のあいだに、司

馬遼太郎とかさ、それから宮部みゆきさんが出てきたし。村上春樹も入っているし。

鵜飼 この中で『失敗の本質』が入ってるのがすごいね。

瀧井 『失敗の本質』って、今でもかなりランキングの上位に入ってますよね。

鵜飼 やっぱ、どうして負けたのか、ということとは永遠のテーマですよ。これ読んでからじゃ遅いんだけど(笑)。

●○○年代

瀧井 この○○年代になると、ミステリーがこんなに多いんだ、って思いました。『ルームメイト』など取材させていただいたことはありましたけれど。

鵜飼 でもこれすごいよね、みんな無冠の帝王っぽい人ばかりですよ。菅田さんは大きな賞をとってておかしくない感じあるんだけど。

瀧井 ああ！ そうですね。角田光代さんをのぞき……。

鵜飼 『八日目の蟬』のヒットは新聞連載をお願いした立場としては非常に嬉しい(笑)。

瀧井 そうですね、ドラマ化されて映画化されて。この○○年代のを見ると、やっぱり書店さんが仕掛けて成功したベストセラーが多いなっていうのはすごく感じます。『ルームメイト』も、『世界史』もそうですし。明野照葉さんの『汝の名』も。あと『ピース』！ 『ピース』は

完全に仕掛けですよ。

鵜飼 今、西澤保彦さんの『聯愁殺』も十万部ですけれど、これも。

瀧井 新刊からもう二年以上経っているのに。

鵜飼 明野さんもそうですけれど、キャリアはあっても受賞歴がほとんどない人が、いきなりどーんとヒットを飛ばすのが面白い。読売新聞記者出身で警察小説が人気の堂場瞬一さんもそうだけ。

瀧井 やっぱり店頭に本が多すぎるから、実力派だけれど知名度はまだいまひとつという作家に火がつくってことなんでしょうね。

嵐山 ぼくは古本や、旧著名作しか興味がないの（笑）。

瀧井 今後の文庫に望むことはありますか。

鵜飼 やっぱり中公のよさってというのは、嵐山さんがおっしゃった秘密結社っぽさ、ある種独特の編集者の目をいかすってことが大切だと思っんです。改版にしろ、新しく編集しなおして出すにしろ、何かやっぱり中公の編集者の目くぼりの仕方——中身だけじゃなくて装幀、挿絵も含めて——そういうすばらしい伝統の精神をどんどんリレーしていつもらえたらいいのではないかなあ。個人的な希望としては、やっぱり背表紙の色があんまり派手なのは、中公文庫らしくないんじゃないかっていう（笑）。

嵐山 名著復刊や、珍書・奇書も入れてもらいたいです。中公文庫のファンとしては、古書店

の棚から絶版になった掘り出し物を探すのが楽しみなんですよ。ディープでマニアックな中公文庫ファンを忘れないで欲しい。目利きの選んだ良書を出してもらいたいというのが希望です。

鵜飼 自社の単行本の文庫化が中心だと先が読めちゃうんですよね。もう何年たったから、そろそろ中公文庫の今度のラインナップにはこの作品が入るだろう、という風に。そこに一冊、嵐山さんがおっしゃったように、「え？　なんで今回こんな本が入ってるの？　いったいどういう素性？」って感じの気になる本が入ってる……。

嵐山 素性がわからない本って……いいよね（笑）。

鵜飼 瀧井さんは、〇〇年代のベストセラーをよく読んでらっしゃるかと思うんですけど。

瀧井 そうですね。私が中公文庫を初めて意識したのはホイジンガの『中世の秋』だと思っただけです。中学か高校ぐらいのときに、教科書に出てくるようなものが、文庫で読めるんだって。私、中公文庫ってすごく真面目なラインナップというイメージをもっていたんですが、この〇〇年代のベストセラーを見てちょっとびっくりしました。こんなふうにいるラインナップなんだって。目利きの人が多方面に目を配ってきているラインナップなんだって。ということが、今日お二人のお話をうかがってわかりました。今日はありがとうございます。

誰もが愛した小説

——『赤頭巾ちゃん気をつけて』

小池真理子

庄 司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』が刊行されたのは、一九六九年八月。全国で学園紛争が激化し、大学のみならず高校にまで火の粉が飛び始めた年である。

その年の一月には、東大の安田講堂を占拠していた過激派が機動隊の攻撃を受けて陥落。東大の入学試験が中止になる、という前代未聞の事態にまで発展した。

巷では、いしだあゆみの『ブルー・ライト・ヨコハマ』やピンキーとキラーズ『恋の季節』が大ヒットしていた。メンソール系のタバコを吸うと「不能」になる、という、まことしやかな都市伝説のようなものが全国に拡がっていた。男の子の間では、髭をはやし、髪を伸ばすのが流行していた。女の子はミニスカートのみならず、パンタロンをはき

始めた。

アメリカから渡ってきたウーマンリブの思想が定着し、男女同権はあたりまえになりつつあった。女は男に支配されるな、男に盲従するな、自立せよ、経済力をもて……といった考え方、そこから派生した「家庭は諸悪の根源」といった考え方が、若者たちを中心にして急速に広まり始めた時期でもあった。

当時、私は十七歳。父の転勤に伴って転校した仙台の県立高校に通う高校二年生だった。親に内緒で反戦フォーク集会に参加し始めたのもそのころだ。

その集会で出会った、二つ年上の髭をはやした浪人生に恋をした。翌年、彼が東京の大学に合格し、一人暮らしをするための準備をしていた時、実は僕には東京に年上の恋人がいる、と打ち明けられた。恋は呆気なく大失恋に終わった。

高校三年になった年の夏、市内にある「無伴奏」という名のバロック喫茶で、同い年の男子高校生と知り合った。彼は全共闘活動をする高校生活動家だったが、文学が好きで意気投合した。二人で待ち合わせるのはいつも書店だった。乏しい小遣いを出し合って新刊を買ひ、互いに読



庄司 薫

『赤頭巾ちゃん気をつけて』
1973年

み終えると必ず、感想を述べ合った。高橋和巳、柴田翔、大江健三郎、サガン、ボードレール、倉橋由美子……彼と二人で読みあさった幾多の本の中に、この『赤頭巾ちゃん気をつけて』があった。

本書の中には「由美」という女性が登場する。主人公の「薫くん」が深く意識してつきあってきた女友達である。彼女の口癖が、「舌かんで死んじゃいたい」というもので、その言い方がとてもおしゃれで、かっこよくて、小粋なフランス映画のワンシーンを思わせて、私もよく、彼の前で気取って「舌かんで死んじゃいたい」と言ってみたものである。

私の言い方は下手くそで、いつも芝居がかった調子にしか聞こえなかったはずだが、彼はその都度、「そのセリフ、いいよね」と言ってくれた。

それにしても、当時、この本を読まなかった人がいただろうか。年上年下、性別を問わず、親しくなった人の家を訪ね、その人の部屋に通されると、スチール製の書棚の中には決まって、大江やサルトルやポリス・ヴィアン、カミュなどの本に混ざって、『赤頭巾ちゃん気をつけて』が並んでいたものだった。誰もが読み、誰もが愛し、誰もが話題にした小説だった。

この稿を書くため、四十年ぶりに（！）読み返してみた。古びたとこ

○こいけ・まりこ

一九五二年、東京都生まれ。

成蹊大学文学部卒。八九年

「妻の女友達」で日本推理作

家協会賞、九六年「恋」で直

木賞、九八年「欲望」で島清

恋愛文学賞、二〇〇六年「虹

の彼方」で柴田錬三郎賞、一

二年「無花果の森」で芸術選

奨文部科学大臣賞、一三年

『沈黙のひと』で吉川英治文

学賞を受賞。

ろのどこにもない、現代の若い作家が書いたものと言っても充分通用する、際立ってセンスのいい都会的な小説である。性や受験勉強や世の中のことに悩む高校生の「薫くん」の、知的でウィットに富んだモノローグは、この先、永遠に読み継がれていくことだろう。

● 70年代の主な出来事

70年大阪の万国博覧会開催。よど号乗っ取り、三島由紀夫割腹自殺。71年沖縄返還協定調印式。72年冬季オリンピック札幌で開催、田中角栄「日本列島改造論」、川端康成自殺、沖縄の本土復帰と日中国交正常化の実現。73年物価急上昇、石油ショックでガソリン、紙など品不足。74年戦後初のマイナス経済成長。75年新幹線岡山―博多間開通、ベトナム戦争終結、沖縄海洋博覧会開催。企業

倒産も相次ぎ、海洋博は低調のうち閉幕。76年ロッキード事件が政界をゆるがす。77年王貞治本塁打世界記録樹立、平均寿命世界一になる、カラオケ大流行。78年日中平和友好条約調印、成田空港開港、米中国交正常化。ディスコブーム。79年大学入試共通一次試験実施、第二次石油ショック、第一回国際女子マラソン、ソ連軍アフガニスタンに侵攻。

ひとつの土台として

——『言わなければよかったのに日記』

角田光代

本

をそれなりに読んできたつもりで大学を卒業して、翌年、小説家としてデビューしたとき、周囲の人たちの話している作品が何ひとつわからなくてびっくりした。書名はおろか作家名も知らない。長く望んで入った世界がとんでもないところで、私はそのなかで無知無教養部門ぶっちぎり第一位で、おそらく、そこから抜け出すのはほぼ不可能だろうと思い、こっそり打ちのめされていた。「こっそり」というのは、そんなこと、恥ずかしくてとても人に話せなかったから。

はじめての単行本が出たのが新人賞をいただいてから一年後ほどで、そのころ、私はアルバイトをやめて一カ月半の旅に出た。いき先はタイ。そのことを伝えると、担当編集者が、深沢七郎という人の文庫本を五、六冊持ってきて、旅のあいだに読んでくださいと言う。どこか、あなた

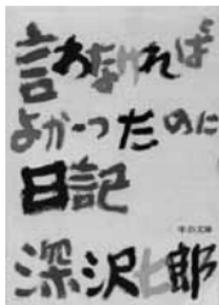
の小説に似ているとぼくは思うんです、とその人は言った。

深沢七郎という作家も私は知らなかったのだ。『檀山節考』の人だと聞いたってわからないほどの無知っぷり。そのときの旅に持っていたのはその五、六冊と泉鏡花である。

バンコクから北へ北へと進みメーサイまで行って今度はゆっくり南下、スラターニーからサムイ島にいった。ずっと本を読んでいた。乾期のバンコクの、容赦ない日射しと熱気、排気ガスと埃の混じったにおい、そんななかに本が立ち上げて見せる世界はことごとく異様だった。私はその異様な世界をどのようにとらえていいのかわからず、ただ、汗をかき鼻の穴を真っ黒にして、その世界を見つめていた。好きか嫌いかといえば、ものすごく好きだった。その異様さを好きだった。

『言わなければよかったのに日記』も、手渡された本のなかにあった。

これを読んでではじめて私は心から安堵した。小説を読んでいるときの、あの、影が濃く暗いのにどこまでも乾いた異様な世界は、このエッセイからは立ちあらわれないのだ。エッセイ前半で、この作家は、自身の無知ぶりと失敗を、まったく飾らず描き出して、私は幾度も声をあげ腹を抱えて笑った。眠ろうと堅いベッドに横たわり、天井を見上げているう



深沢七郎

『言わなければよかったのに日記』

1987年

ち、あぶくみたいに思い出し笑いがせり上がってきたりした。

旅は一カ月半もあったので、何回も何回も、くり返し読むことができ
た。そうしながら、編集者の言葉を思い出し、私といたたいどこが似て
いるんだらうと考えた。あんな異様な、それでいて深く根の張った、土
のにおいのする小説は、私の書くものとは無縁に思えるし……。

と、なると、エッセイしかないのだった。そうか、きっとあの編集者
は、正宗白鳥の家にはぜったいに池があつてそこに白鳥がいるはずと思
いこむ深沢七郎と、私が、似ていると言つていたのだな。たしかに私は、
そのくらいなんにも知らない。実存主義が何かとこの作家は訊いてまわ
っているけれど、実際に私だつてそれが何か、知らない。そうだそうだ、
ものを知らないところが似ているのだ。そう納得した私は、ある天啓を
受けた。知らないなら、知つたかぶりなどしないで、知らないと言え
いいのだ。わからないならわからないと、見たことがないのなら見たこ
とがないと、こんなふうに率直に言えればいい。そうだ、編集者は、この
ことを伝えたかつたに違いない。無知無教養ぶちぎり第一位でいつも
恥じ入っているから、私を気の毒に思つたのだから。

今思えば、それこそ馬鹿みたいな解釈だなあと思うし、深沢七郎にた

○かくた・みつよ

一九六七年神奈川県生まれ。

早稲田大学第一文学部文芸科

卒業。九〇年「幸福な遊戯」

で第九回海燕新人文芸賞を受

賞しデビュー。九六年『まど

るむ夜のUFO』で野間文芸

新人賞、九八年『ぼくはきみ

のおにいさん』で坪田譲治文

学賞、二〇〇三年『空中庭

園』で婦人公論文芸賞、〇五

年『対岸の彼女』で直木賞、

〇七年『八日目の蟬』で中央

公論文芸賞を受賞。

いしておこがましきを感じるが、じつのところ、あのとき私は作家として自分がどうあるべきかを決めたようなところがある。わからないことをわかったつもりになってはいけない。わかったとしても、わからないかもしれないと疑っていないといけない。それは小説を書くときの、自身へのいちばんの戒めで、それはタイで読んだ深沢七郎の異様な小説と抱腹絶倒のエッセイからきているのである。

● 80年代の主な出来事

80年モスクワオリンピック不参加、校内暴力、家庭内暴力急増。81年ポルトピア81開幕、「窓際のトットちゃん」大ベストセラーに。82年ホテルニュージャパン火災、日航機逆噴射事故、東北新幹線、上越新幹線開業。83年東京デイズニーランド開園、田中角栄に実刑判決、日本初の試験管ベビー。84年三浦一義「ロス疑惑」、グリ「森永事件」、【FOCUS】

【FRIDAY】創刊。85年科学万博開催、日航機墜落、いじめ横行。86年東京サミット開催、男女雇用機会均等法、チエルノブイリ原発事故。87年朝日新聞阪神支局襲撃。88年青函トンネル開通、東京ドーム開場、瀬戸大橋開通。89年昭和天皇逝去、大喪の礼、消費税スタート、ベルリンの壁崩壊、美空ひばり死去。

『江戸吉原凶聚』

誉田哲也

作家が作品を書くきっかけは、実に様々だろうと思う。拙著に関していえば、光文社の「姫川玲子シリーズ」の短編を読んだ某編集者が「うちでも警察小説書いてよ。でもうちは女刑事二人でね」といったのがきっかけで始まったのが『ジウ』だった。同じ編集者が「どっか南の島に取材にいきたい」と言い出したばかりに（注・取材にいきたがったのはあくまでも著者ではない）書く破目になったのが『国境事変』という作品だ。

そんな私の初期作品には、あまり知られていないが時代小説もある。『吉原暗黒譚』という、最近文春文庫から再版されたのがそれだ。いわゆる「時代小説」とは似て非なるものかもしれないが、私なりの江戸新吉原を描くことはできたと思っている。

そもそも私が江戸時代に興味を持ち、それを題材に作品を書くようになったのは石川英輔さんの『大江戸神仙伝』（講談社文庫）に感銘を受けたからだ。具体的には、調べ始め、執筆する段になって役立ったのはむしろ、三谷一馬さんが書かれた「江戸図聚シリーズ」だったと思う。タイトルを挙げると『江戸吉原図聚』『江戸年中行事図聚』『江戸職人図聚』『江戸商売図聚』の四作を私は持っているが、他にも何作かあるようだ。

これらの本をちょっと眺めてみるだけでも、江戸時代の面白さがよく分かる。

当たり前だが、今も昔も日本人は日本人である。白飯を食って日本酒を飲み、風呂では湯船に浸かり、有名人の名前は親しみを込めて縮めて呼ぶ。たとえば、写楽などの浮世絵を出版したことで知られる蔦屋重三郎は「ツタジュウ」と呼ばれた。我々が木村拓哉を「キムタク」と呼ぶのとまったく同じセンスである。

しかし、現代と多くの共通点を持ちながら、これまた当たり前だが江戸時代には様々な点で現代と異なる生活習慣があった。天ぷらは屋台で買うのが主流だった？ 今の握り寿司はもともと「早鮓」と呼ばれてい



三谷一馬

『江戸吉原図聚』

1992年

て、それ以前は作るのに四、五日かかる「古鮎」が主流だった？ 柳や桃、竹などで作ったヘラの先を叩いて広げ、歯ブラシの代わりに行っていた？ 吉原の遊女って、○ツチするときも全部脱がないの？ などなど、知れば知るほど、ちょっとした現代との違いが面白くて仕方なくなる。

「江戸凶聚シリーズ」は、江戸の風俗画を色なしの線画に描き直し、簡単な解説を加えて数百点収録した画期的な資料本だ。特に『江戸吉原凶聚』は『吉原暗黒譚』の執筆時、大いに参考、活用させていただいた。

柳橋の船宿から山谷堀までは猪牙舟ちよきぶねに乗り、そこから長い日本堤を歩き、あるいは駕籠に乗り、左に折れて五十間道を抜ければ、もうそこに吉原の大門が——この間の風景も男たちのニヤけた顔も、すべてはこの本からすくいとって書いたといっても過言ではない。

大門から見るメインストリートの賑わい、客を迎える遊女、店に刀を預ける武士、揚屋での大宴会、そして客はようやく遊女の部屋へ——そこで終わらないのがまた、この本の素晴らしいところ。人気のなくなつた夜の吉原。夜が明け、客が帰ってからの遊女の暮らしぶり。さらには「せっかん」される遊女など、吉原のダークサイドまで詳細に描ききつている。

○ほんだ・つや

一九六九年東京都生まれ。二〇〇三年「アクセス」で、第四回ホラーサスペンス大賞特別賞受賞。〇五年にC★NOVELSより『ジウ 警視庁特殊犯捜査係』を上梓し、『新たな警察小説の誕生』として大反響を呼ぶ。著書に、『ジウ・II・III』『国境事変』『歌舞伎町セブン』、『ストロベリーナイト』『感染遊戯』ほか(姫川玲子)『シリーズ』、『武士道シックスティーン』、『シリーズ』、『疾風ガール』、『シリーズ』、『ドルチェ』ほか(魚住久江)『シリーズ』、『レイジ』、『あなたの本』、『あなたが愛した記憶』、『幸せの条件』などがある。

このシリーズをガイドに『吉原暗黒譚』を読んでほしい、などといったら拙著の小説としての完成度を疑われそうだが、そうしてもらえたらより楽しめるのは間違いないと思う。

ここはぜひ、セットでいかがか。

● 90年代の主な出来事

91年大学入試センター試験、花と緑の博覧会、天皇即位の礼。92年湾岸戦争、いざなぎ景気越え、バブル崩壊。93年EC12力国単一市場発足、皇太子結婚。94年松本サリン事件、大江健三郎、ノーベル賞受賞。95年阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、オウム真理教代表逮捕、東京都

市博中止、戦後50年。96年チャールズ皇太子離婚、羽生善治、初の7冠制覇、消費税5%に引き上げ、携帯電話普及。97年和歌山毒カレー事件、米国でiMac発売、長野で冬季オリンピック。99年ミレニアムカウン
トダウン。

『八日目の蟬』

島本理生

ま だ独身の頃に、『八日目の蟬』を読んだときは、純粹に物語としての面白さに魅了された。スリリングで切実な逃走劇の結末が気になって、ページを捲る手が止まらなかつた。

そのときの私の心境は、どちらかといえば誘拐された後の娘に近かつた。状況は違えど、感情を殺し、冷静に割り切っているように見せて大人のふりをしながらも、実際はなにもかも中途半端で足元が不安定な二十代の自分自身を投影していた。

一昨年、長男を出産した後、ひさしぶりに会った知人と『八日目の蟬』の話になり、なにげなく読みかえそうと一ページ目を開いた瞬間、強い動揺が全身に走った。

ぐらぐらと気持ち揺さぶられて、読み始めて、ものの数分で、涙が

流れた。

普通に考えれば、子供を誘拐された母親に感情移入してもいいはずなのに、私の気持ちは、赤ん坊をさらった希和子にどっぷりと寄り添っていた。

初めて子供を持つまで、母性とは、最初から安定して女性の中に備わっている機能だと思っていた。けれど実際には、赤ん坊に触れて初めて、なにもない大地にいきなり草木が芽吹き、暴力的に繁殖していくような愛情を知った。それは私にとって、半ば欲情にも似た、即物的な身体感覚だった。

だから、赤ん坊を抱いた瞬間に「離しちゃいけない」「私がまもる」という希和子の、一見、身勝手に矛盾に満ちた感情が、あまりにも生々しく胸に迫ってきた。

赤ん坊をさらってどこまでも逃げようとする希和子に、これほど共感し、胸を締め付けられるのは、どんなに愛していても永遠に子供と一緒にいられない、という宿命を、母親という存在が背負っているからではないだろうか。

なにかを愛したとき、人は、かぎられた時間という絶望の中にいるこ



角田光代

『八日目の蟬』

2011年

とに気付く。

その孤独と光は、『八日目の蟬』というタイトルそのものだと思う。

また、この『八日目の蟬』という文庫が、2000年代の中公文庫の1位に輝いたという事実にも、私は強く励まされた。

私の短い作家生活の中でも、才能のある新人作家が次々と登場して、自分の作風に迷ったり、この先、ずっと小説を書いていけるのだろうかと不安になることは何度もあった。たくさん小説を生み出すほど、いずれ読者が飽きたり、似たようなことしか書けなくなるのではないかと、と悩むこともある。

そんな中で、角田光代さんはむしろ月日を重ねるほどに、どんどん才能を開花させて最高傑作を更新していった、とても稀有な作家だ。

それは、小説を書き続ける者にとって、はるか遠い高みであると同時に、これ以上はないほどの希望の光でもあると思うのだ。

○しまもと・りお

一九八三年東京都生まれ。立教大学文学部中退。二〇〇一年「シルエット」で群像新人文学賞を受賞しデビュー。〇三年「リトル・バイ・リトル」で野間文芸新人賞受賞、他の作品に『ナラタージュ』『大きな熊が来る前に、おやすみ』『アンダスタンド・メイビー』などがある。

●書店さんからの声

中公文庫の思い出

三省堂書店 内田剛様

大学で日本史を専攻していた頃、最も傾倒したのが網野善彦。そこから民俗学へも興味をもち、ちくま文庫『柳田國男全集』と中公文庫の『折口信夫全集』を買ひ集めた日々が忘れられない。前者はシリーズ刊行中だったため大学生協で定期予約、後者は旧版を目当てに古本屋を巡って掻き集めた。どうしても揃えたくて、何度、食事を抜いたことだろう。苦勞した分、「折口全集」への思い入れは深い。学問への憧れ、活字の蒐集欲、その素晴らしさは先達たちから教わった。あれから約二十五年。身の丈以上だった知的な背伸びも少しは自分の血肉となっっているような気がする。純粋な好奇心を充たす旅は永遠に続く。

中公文庫を語る

八重洲ブックセンター 内田俊明様

中公文庫について二百字で語る。無理です。武田泰淳&百合子、庄司薫、ドナルド・キーンに三田村鳶魚。独自の

作品群を挙げるだけで字数が埋まってしまふ。でもやっぱり中公といえは谷崎潤一郎ですね。ラビリンズ、シリーズで文庫版最多の収録作品数を誇るあたり、谷崎なら中公という気概を感じます。代表作でも、例えば小倉遊亀の挿絵つき『少将滋幹の母』なんか、新聞連載時の息吹が感じられてより味わい深い。いつか文庫版全集を出してほしいものです。

私にとつての中公文庫

東武ブックス 遠藤敏正様

中公文庫との出会いは、中学の頃。

父の本棚に中公文庫が比較的多かった記憶があります。

当時は『陰翳礼讃』などタイトルすら読めず、父に「これなんて読むの?」と聞いた覚えがあります。

いま、父親になって、何か子供が興味を持って読めるものがないかなと、思つて目についたのが『フチ哲学』（佐藤雅彦）。

著者は、NHK「ピタゴラスイッチ」の監修をしていて、そのセンスは大人もつい見入ってしまうほど。

子供には楽しく「考えること」を身に付けて欲しくて、一緒に繰り返し読んでます。

中公文庫の佇まい

くまざわ書店 佐々木俊章様

中公文庫の棚にはどこか古風で静かな佇まいがある。これは谷崎潤一郎や内田百閒といった著者名がそうした印象を与えるのかもしれない。また端正で落ち着いた装丁によるところもあるにちがいない。かつて愛読していた吉田秀和の『主題と変奏』を久しぶりに読み返してみると、あの丸谷才一をも唸らせた名人の文章が以前にもまして味わい深く響いてきた。感嘆措くあたわざる、とあえて古めかしい書き方をしたくなるような雰囲気がいまでも中公文庫には残っていて、それが私にはとても好ましい。

とっておきの中公文庫

勝木書店 海東正晴様

まだ私が店舗で文芸書の担当をしていた頃、池澤夏樹さんの著書を棚からごっそりとあるだけ抜いてレジに抱えてこられたお客様がいて、「揃えてくれてありがとう」と、お礼まで言われた。その時の印象があまりにも強烈で、いつか読んでみようと思っていた矢先に出会ったのが、中公文庫の『すばらしい新世界』と『スティル・ライフ』でし

た。この二冊は今でも私の「とっておき」で、辛い事があつた時などにそっと取り出して読み返しています。

私にとつての中公文庫

ブックファースト 梶野光弘様

今私の目の前には、古びた十一冊の全集が並んでいる。私が生まれた年に刊行が開始されたこの全集は、今は亡き母親がかつて愛読していた作品である。母親が急逝した十五歳の夏、書架を整理してこの本と出会った。古典と正面から、向き合った最初でもある。そして、その時の衝撃がその後、私を谷崎文学の虜とすることとなる。『新々訳 源氏物語』……思い出の詰まった大切な本だ。中公文庫といえば『陰翳礼讃』が人気だろうか。でも私は、この母の形見と一緒に『瘋癲老人日記』でも胸に抱いていつかは母の元へと思っている。

2013年
春号



中央公論新社